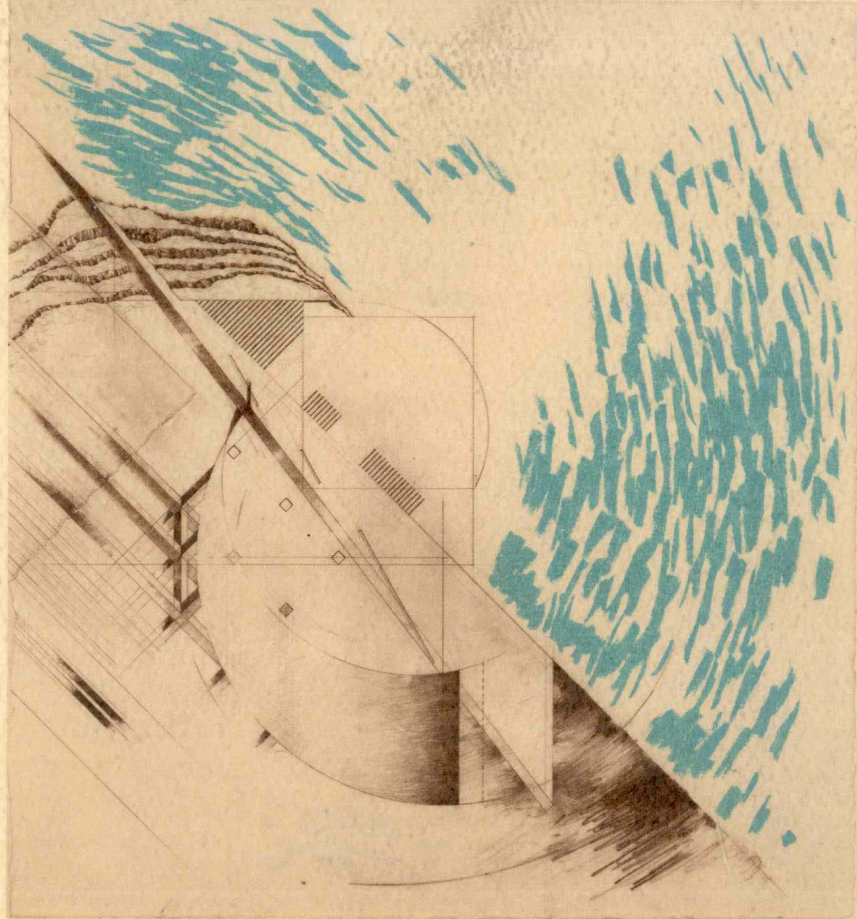




平凡社

# 漂泊の物語

説経『小栗判官』

異郷からの訪れ

廣末 保

廣末 保(ひろすえ たもつ)

一九一九年高知県生まれ。

一九四一年東京帝国大学文学部国文科卒業。

著書『境界の悪所』(平凡社)

『西鶴の小説』(平凡社)

『もう一つの日本美』(美術出版社)

『増補 近松序説』(未来社)

『四谷怪談』(岩波書店)

『心中天の網島』(岩波書店)

『可能性としての芭蕉』(御茶の水書房)

『新編 悪場所の発想』(筑摩書房)ほか

## 漂泊の物語

説経「小栗判官」  
異郷からの訪れ

一九八八年七月二十五日 初版第一刷発行

定価 二、八〇〇円

著者 廣末 保

発行者 下中直也

発行 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区三番町五

電話

〇三(二六五)〇四七一(編集)

〇三(二六五)〇四五五(営業)

振替 東京八二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

製函 永井紙器印刷株式会社

© Tamotsu Hirotsue 1988 Printed in Japan

ISBN4-582-33304-4

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが、小社読者サービス係あて  
お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

# 漂泊の物語

説経『小栗判官』

異郷からの訪れ

廣末  
保

平凡社



## 目次

I  
説経『小栗判官』——漂泊の物語

小序

不調の小栗

妻嫌い 不調なる貴種 物語が訪れる

マジナルな精神空間と物語空間

餓鬼阿弥の土車を引く道行 物語による顕在化 物語と場

説経の徒——漂泊芸能民の実体

作者的視点の成立

発生論と物語——常陸と相模 在地性をめぐって 侵し・排除・報復の構図

拠点としての美濃青基あたり

漂泊のもつ垂直志向と無時間性

都（みかど）空間

二次伝承化としての物語

伝承説話のモチーフと『小栗』 虚・実の外 大蛇と竜王の争いと小栗追放

二次伝承化の揺れ

閉じられることのない物語

大往生する小栗——常陸の位相の変化 荒人神への分化——拠点としての美濃墨俣

二次伝承化と芸能化

呪縛と解放

追記Ⅱ二極分解と都（みかど）空間

## Ⅱ 旅の境涯

Ⅲ 遊民的喪失感と異郷・マレビト——折口芸能論に潜在するもの

Ⅳ 異郷からの訪れ——折口信夫の実感と論理

「合理」の否定と「実感」

旅と幻視——河原のイメージ

異郷意識——折口の自己矛盾的な立場

琉球——異郷から来訪する神

訪れるものへの恐怖と憧憬

マレビトとホカヒビト——民俗としての心理

マレビト信仰と芸能

「年月つき」でない古代と末世の意識

小説「身毒丸」——異郷人的血脈への自己虚構化

折口の天皇論、その一——マレビトと天皇

折口の天皇論、その二——天子非即神論と折口学の危機

呪われた貴種

あとがき

初出一覧



I

説経『小栗判官』——漂泊の物語



## 小序

これから述べようとするのは漂泊や漂泊芸能民について、物語ではない。

漂泊芸能民たる説経の徒の作り出し、語った物語——そのなかのひとつ、『小栗判官』（以下、総称としては『小栗』）の物語についてである。これら二つの物語を完全に切り離して考えることはできないとしても、しかし一度は切り離してみる必要があると思う。漂泊や漂泊芸能民についての物語を書くためにもそれは必要だと思う。

説経のなかでも『山椒太夫』や『苳萱』や『信徳丸』や『愛護若』など、よく知られた物語が、ほかにもないではない。だが、わたしにかぎって云えば、『小栗』がなければいまほど説経の世界にひきいれられるということはなかったと思う。もっと率直

に云えば、わたしは説経というジャンルもだが、それよりもいまは、『小栗』という物語そのものにひかれている。

『小栗』には、ほかの説経物語にくらべると、メロドラマ的な要素が少ない。美濃青墓の長のもので、照手が水仕をしながら、小栗に操を立てるといった場面などもあって、恋物語として聞くものの心を揺さぶるということがまったくなかったとは云えないだろうが、それでも、泣かせて聞かせるといった要素は、ほかの説経物語にくらべて、はるかに少ないと云えるだろう。『小栗』には、なにかもつと別の次元から語りかけてくるものがあり、それがわたしをひきつける。

説経というジャンル（それをどのようなジャンルとして規定しうるかはともかく）を視野にいれることなしには『小栗』を扱うこともできないだろうし、反対にまた『小栗』論は説経論にもなっていくだろう。とすれば、わたしの『小栗』好きは、どこかねじれているということになりそうだが、とりあえずは、ねじれたままにしておこうと思う。『小栗』は『小栗』として扱ってみるほうが、『小栗』のためにも、そして結局は「説経」のためにもよさそうだ、といまは考えている。

だが、そうは云ってみても、いきなり『小栗』の物語にはいっていくことがわたしにはできない。はいってはいれないわけではないし、現に、はいったり出たりを繰り返して、いまここにいるわけでもあるのだが、この繰り返し、必ずしも熟読玩味を意

味するようなものではなかった。『小栗』という物語に取り組もうとしたつもりが、気がつくと、土俵の外にあって送り返されていて、〈物語〉なるものが、どこにどのようなかたちで存在しているのかわからなくなる。おかげで自分がどこにいるのかもわからなくなる。そこでまた、のこのこと土俵のうえにあがる。なんだかそれを繰り返して、そのうち、仕切り直しばかりして一向に立ちあがれなくなっている自分に気づく。目を凝らせば凝らすほど朦朧としてくる。民間伝承としての物語、いや違う。虚構物語、いや違う。しかし、そこにそれが在るのは疑いようもない。いったい、どういう種類のこれは物語なのか。

『小栗』の物語にいきなりはっていくことがわたしにはできない。わたしの『小栗』論はまず仕切り直しから始めるしかない。仕切り直しているうちに、だんだん焦点が定まってくるか、それとも溶解してしまいか、それは予断を許さない。どちらがよいとも云えない。

作品の具体的な展開に即しながらの分析も試みてみなければならぬとは思っている。だがそれは、またの機会にゆずるとして、いまはともかく、はいれるところからはいつてみようと思う。

不調の小栗

妻嫌い

周知のように、絵巻『をくり』の場合、本地語りの形式で始まっている。

そもそも、この物語の由来<sup>ゆらい</sup>を、くわしく尋ねるに、国を申さば、美濃<sup>みの</sup>の国、安八<sup>あんぱち</sup>の郡<sup>こおり</sup>、墨俣<sup>すのまた</sup>、たるいおなことの神体<sup>ひと</sup>は、正八幡なり。荒人神<sup>あらしがみ</sup>の御本地<sup>ほんち</sup>を、くわしく説きたてひろめ申すに、これも一<sup>ひと</sup>とせは、人間にてや、わたらせたもう<sup>2</sup>。

説経『小栗』における本地的性格は、『小栗』の〈物語〉としての性格——わけてもその〈物語空間〉の在りようを考えるうえで、すこぶる重要だが、それについてはいま暫くおくとして（この稿の終りまで待つてもらうとして）この冒頭の本地語りは、小栗生前の異常性をいちはやく予告していると云える。（神になるということは、神になるしかないということでもありうるからである。）続いてこのあと生前の物語になるが、そこで小栗は鞍馬毘沙門の申子として出生する。これもまた小栗の異常性を暗示していると云えなくもない。

だがこれらはまだ予告であり暗示であつて、物語のなかでその異常性が、それとして最初にあらわれてくるのは、小栗の〈妻嫌い〉によつてであつた。

さあならば、小栗に、御台<sup>みだい</sup>を迎えてとらせんと、御台所をお迎えあるが、小栗、不調<sup>ふちよう</sup>な人なれば、いろいろ妻嫌いをなされける。せいの高いを、迎ゆれば、深山木<sup>みやまぎ</sup>の相とて、送らるる。せいの低いを迎ゆれば、人尺<sup>にんしゃく</sup>に足らぬとて、送らるる。髪の長いを迎ゆれば、蛇身<sup>じやしん</sup>の相とて、送らるる。面の赤い<sup>おもて</sup>を迎ゆれば、鬼神<sup>きじん</sup>の相とて、送らるる。色の白いを迎ゆれば、雪女、見れば見醒<sup>さ</sup>めもするとて、送らるる。色の黒い

を迎ゆれば、げす女、卑しき相とて、送らるる。送りてはまた迎え、迎えてはまた送り、小栗十八歳の如月きげのきより、二十一の秋までに、以上御台の数は、七十二人とこそは聞こえたもう。(絵巻『をくり』)

〈妻嫌い〉には、聞くものの耳を楽しませるユーモラスな誇張があるが、『小栗』の場合、それは「不調」をあらわすための誇張と重ねられている。「不調」とはどういうことか。東洋文庫(荒木繁・山本吉左右編注)では次のように注記している。「常軌をはずれることをいう。だから外面的には、ほしいままにふるまい、わがままで、行儀が悪かったり、時には淫らでだらしないことにもいい、内面的には、気分がすぐれず、幻覚などを見がちな心理状態をいう。ここでは前者の意で、英雄の特徴をいう。」わたしもこの解釈にはば同意している。簡潔に「淫乱の意」としている注もあるが、その場合でも、その淫乱のもつ異常性が強調されていることばだと思う。

もっとも、〈妻嫌い〉(そのいちいちの難なんのつけかた)は、いつの場合も小栗と同じような不調性の強調になっているわけではない。それは類型化し自立化し、殆ど同型のままで室町期のほかの物語にも取り込まれているのだが、たとえば国会図書館蔵写本『もろかど物語』では、二条の中将の妻嫌いを「色このみ」のせいになっている。そ

のことから色好みと不調は同義語であると推理できなくもないが、都から下った国司であるこの中将のような色好みは小栗にはない。また、小栗にみられるような異常性ともその「色このみ」は結びついてはいかない。小栗はその〈妻嫌い〉のあと、みぞろが、池の大蛇と契るが——そして父兼家のことばをかりれば、これもまた「心不調な者」の所行であって、そのため小栗は常陸へ流されることになるのだが、『もろかど物語』では、そのような異常性・呪性とは無縁な〈妻嫌い〉として取り入れられており、呪性はむしろ、中将と敵対関係にあるもろかど（主人公）のほうにある。〈妻嫌い〉を不調とするか色好みとするか、それぞれの物語によって直感的（即興的）に使い分けがなされているのだと思う。そして小栗のそれは不調であった。

だが、慶応義塾図書館蔵写本の『貴船の物語』<sup>6</sup>にみられる中将定平の〈妻嫌い〉は少しばかり微妙である。「髪の長きは……」「色の黒きは……」「せいの大なるは……」と難のつけかたは同型だが、それを色好みとも不調とも云っていない。妻嫌いのあとにつづくのは、「九重のうちにも、御心にあひたる人なし、心をすまして、春は花のもとにて日をくり、秋は月のまへにて夜をあかし給ける」といった静寂感であって、定平の不調性も色好みもそれは印象づけることがない。しかし、定平はやがて扇の絵女房に、さらには鞍馬の奥の鬼国の姫へと心を奪われてゆくのであって、その展開の過程に初瀬の観音や毘沙門が関与したり、鬼国での異様で恐ろしい光景が描かれたり